

家の中央にまっすぐ伸びる丸太の大黒柱が印象的。リビングの奥は寝室になっている。2階の吹き抜けに面した部分は、写真に向かって左側に子ども部屋、右側にパソコンコーナーがある。

いろいろな種類の窓を効果的に配置し、陽射しや風の通り道を計算



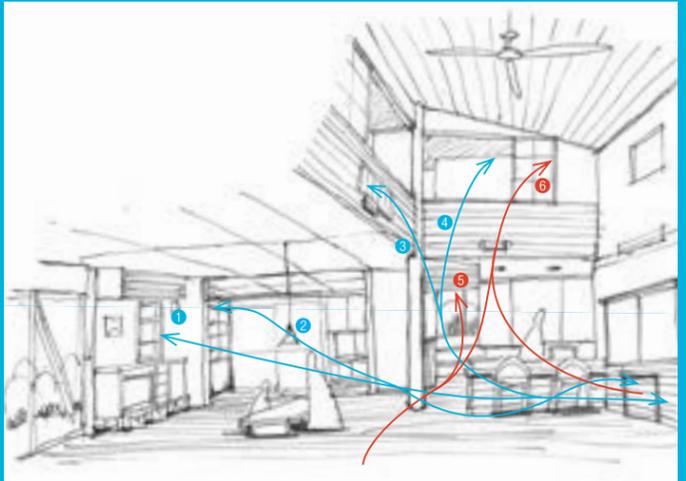
41歳のご主人と38歳の奥さま、それに小学3年生の男の子の3人暮らしのお宅。中央の丸太柱を中心にキッチン・ダイニング・リビングが連続。フローリングの床はカバ材。

■建物概要
 家族構成 / 夫婦+子ども1人
 建築場所 / 群馬県桐生市
 敷地面積 / 241.57㎡
 延床面積 / 146.66㎡ (44.27坪)
 構造 / 木造軸組工法 (2階建て)
 一部鉄骨造 (車庫)
 竣工年月 / 2008年9月
 発注方式 / CM分離発注 (オープンシステム)

丸太の大黒柱がある 光と風の家

①②③は、南北東西に通る風。時期によって風向きは変わる。①ダイニング地窓⇄高窓 ②ダイニング地窓⇄和室欄間窓 ③ダイニング地窓⇄子ども部屋無双窓 ④ダイニング地窓⇄階段上部高窓 ⑤⑥は暖まった空気を外に出す上昇風。⑤玄関ジャロジー窓→階段上部の高窓 ⑥ダイニング地窓・玄関ジャロジー窓→玄関側にある高窓

家の中央にはまっすぐに伸びる丸太の大黒柱。それを中心にした吹き抜けの広い部屋は、すみずみにまで光が満ち溢れている。設計した佐藤秀人さんは「自然」にこだわる建築士だ。この家は、佐藤さんが初めてCM分離発注に取り組んだ家。自分の理想がダイレクトに実現できたと言っている。



家と人のきろく その2—
 ■設計監理 / 櫛建築設計所
 撮影 / A.K.A.
 取材 / 弘中百合子・武藤昌一
 記事 / 弘中百合子



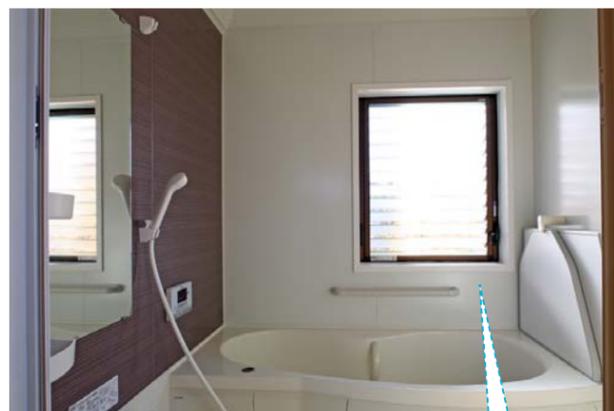
リビングの隣になる和室は縁のない琉球畳。左の障子の上にある欄間窓は、家の中に風を通り抜けさせるのに効果的。押入れ右手にも障子窓。このように、どの部屋からも2方向の景色が見えるつくりになっている。



訪問客の視線を意識した小さな窓。庭を1枚の絵のように眺められる額縁的な窓になっている。



●ジャロジー窓
細長いガラス板が水平に並んだ窓。ブラインドのように開閉ができる。



湿気がこもらないように、換気に向けたジャロジー窓(上の玄関の写真参照)を取り付けた。風が南北に抜けるつくりになっている。浴槽はパナソニック製の強化プラスチック。壁、床も強化プラスチック。



●ジャロジー窓
玄関と同じく、換気や光の調節に向くジャロジー窓。1階なので、外にはよしずを置いて目隠ししている。

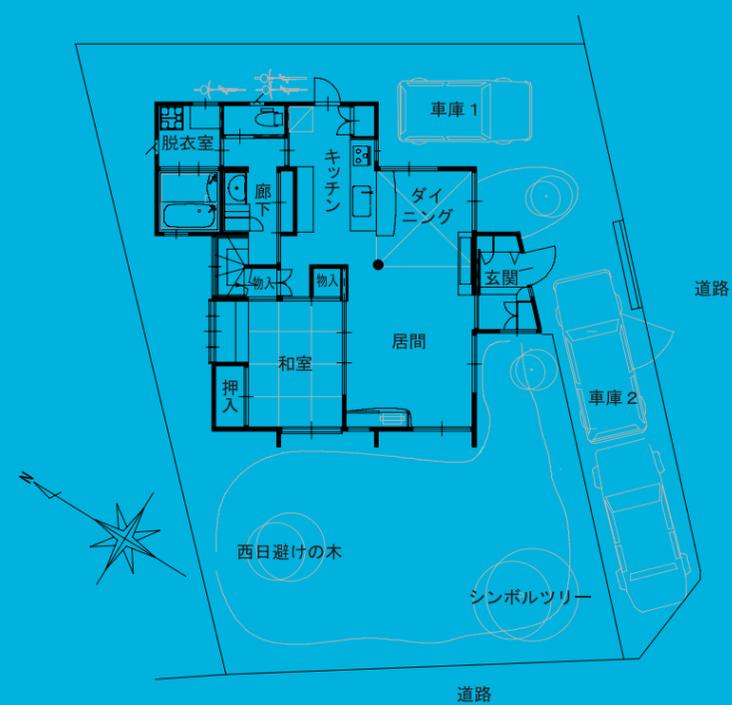


脱衣室にはメッシュバスケットで下着やタオルがしまえる収納棚を作った。カウメッシュバスケットは棚底に埃が溜まらず衛生的。



洗面所には、無垢の木と相性のよい青のモザイクタイルを貼った。カウンターとボウルは人造大理石。周囲には収納スペースもたっぷり。

1F 地窓、ジャロジー窓、 高窓、無双窓… 窓から窓へと 風が通り抜ける



■間取り図

敷地は南東に道路がある角地。車が3台置けるように…というのがFさんの要望だった。3台分の駐車場が道路との緩衝帯になっている。太陽光が長時間降り注ぐ南東に居間を、朝日や東からのそよ風が入る位置にキッチン配置。玄関以外はすべて引き戸に。「引き戸は必要ときだけ閉められる。住宅建築に合っている、日本が世界に誇れる建具です」(佐藤さん)。図の黒丸は丸太柱。



「流しの下にスペースがあるので、ゴミ箱等を置けるので、とても使い勝手がいいです。キッチン横の食品庫も便利です」(奥さま)



キッチンのダイニングテーブルの斜め下にある地窓は、木の戸で隠すこともできる。風がよく抜けるこの窓は、奥さまのお気に入り。



朝の光とそよ風が入るキッチン。流し台に立つと目の前の道路が見え、家に来る人の気配や、子どもやご主人の帰りがわかる。



2階の子ども部屋から見たダイニング。キッチンの流し台、柵の木のダイニングテーブルなど、すべて大工さんの手づくり。

さわやかな朝の光が感じられるキッチン

陽射しや風などを 効果的に取り入れる 五感が喜ぶ間取り

Fさんのお宅に初めて足を踏み入れたときの印象は「明るい」だった。それもそのはず、この家には窓が多い。例えばダイニングの窓の下に、さらに地窓(床面に接する窓)も設置されている。「人は床に近い位置で生活しています。地窓をつけることで、風が人のいる場所を快適に流れます。地窓から涼しい風を取り込み、天井に近い高窓から暖気を逃がすつくりなのです」(佐藤さん)
どの部屋にも最低2つは窓があり、2方向を見渡せるようになっている。家の中に風を通すための窓、暖気を上に逃がす上昇風をつくりだすための窓、外の緑を感じるための窓、陽射しを取り入れるための窓、仕切りとしての窓、夜間や雨でも開けられる窓…と、種類や機能も多彩だ。
「自然」にこだわる佐藤さんは、陽射しや風など、人間の五感が喜びそうなものを考慮して間取りや窓の位置を決めている。



琉球畳の周囲をフローリングにして、窓際は、室内の物干し場としても使えるようになっている。右手にはたっぷりの収納スペース。



ご主人が気に入っているファミリーコーナー。テーブルは栗の板。座って左手にある窓からは、北東の山並みがよく見える。



階段の踏み板と手すりは、長く使うほど味わいが出る。腰壁は杉板に自然塗料塗り。上部は珪藻土入り塗り壁。上部の高窓は、夏の暖気を抜くのに効果がある。下の窓は、庭の緑が目に入るように考慮



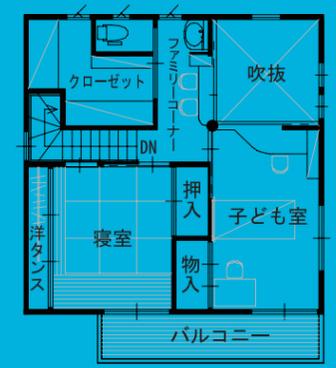
ファミリーコーナーと吹き抜けの間は障子窓。「連続感を損なわずに視線を遮ることができるので、家族が一体感を持って暮らすのに大切な仕掛けだと思っています」(佐藤さん)

それぞれの部屋から 2方向の景色が見える

2F 家族がどこにいても 気配が感じられるように工夫

■間取り図

吹き抜けに面した側に子ども室とファミリーコーナーを配置した。下のLDKと繋がっているため、家族が常にお互いの気配を感じることができる。ファミリーコーナーは、パソコンを打ったり仕事をしたりと、ご主人のお気に入りの場所。奥の和室には広い収納スペースがある。バルコニーも出幅1.2m、横幅5.4mと広い。



子ども室からは、正面の高窓から桐生の山が見える。外の自然を感じられるように、佐藤さんは窓の位置にこだわった。

子ども室の吹き抜け側には、造り付けの本棚とテーブルが。吹き抜けとの境は障子で仕切れるようになっている。吹き抜け側の壁にあるのが無双窓。



●無双窓
窓と壁の機能を持つ、主に室内用の窓。板を横にスライドして開閉する仕組み。空気の流れや視線を調節できる。



この春小学校3年生になる息子さんの勉強部屋。床はバインの無垢板。「寝転んでもやわらかい」と気に入っている。右側の押入は、机を置いて物を出し入れしやすいよう3枚戸に。

**工事管理を最後まで
責任をもって
やってくれそうだった**

F夫妻との出会いは、佐藤さんが仲間と一緒に開催していた「すまいる講座」というCM分離発注の建築講座だ。

「実家が15年前に家を建てたんですが、大工さんはいい人だったので、建具屋さんとか電気工事屋さん、あとで不具合があったときの対応がいまひとつだったので、そういうのがちょっといやだなあと思っていました。そのころオーブンステム(CM分離発注の1つ)を知って、これなら工事監理を最後まで責任を持ってやらせてもらえそうだなと思ったので、講座に参加してみました」(ご主人)

それが縁で、佐藤さんに設計を依頼することになった。

講師が務まるぐらい知識はあったが、佐藤さんが実際に建築士としてCM分離発注を手がけるのは、実はFさんの家が初めてだった。初めてのCM分離発注は、やりがいがある一方、プレッシャーの連続だったという。

**ずっと仕事の中で
「家族」ついでに
考えているんです**

子ども部屋と、ご主人がよく使うファミリーコーナーは、2階の吹き抜けに面した位置にある。吹き抜け側は障子窓にして、それぞれの居場所が閉鎖的にならないように工夫されている。

「障子は閉めても向こう側の気配が感じられるので、連続性を損なわずに視線を遮ることができる優れもの。閉めたときに柔らかい光に包まれたような雰囲気になるのも魅力です」

佐藤さんは家づくりの中で、家族の絆が強まる家というのを理想としている。

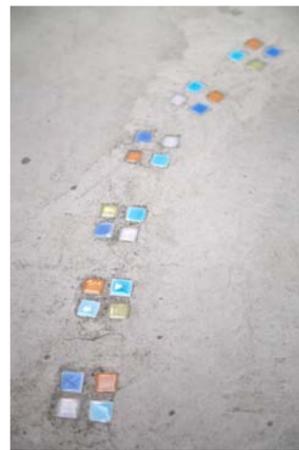
「ずっと仕事のなかで『家族』っていうのを考えているんです。今回はご夫婦と小学生の男の子の家族なので、暮らしていて常に人の気配がする、家族が一体になれる空間がいいと思いました。自分のプランが受け入れてくださるかどうかはお客さん次第ですが、可さんとは価値観が共通していたので、理想を形にできました」



建て主の希望は「片流れの家」と車3台分の駐車場。うち2台は屋根つきにしてほしい、というものだった。車庫をどんな雰囲気にするかが、外観を考える大きなポイントになったという。



玄関扉にはピーラ材（米松の良材）を使用し、落ち着いたダークブラウンに塗った。ポーチは半透明の屋根と斜めの鉄骨で軽快に。結果、和風モダンのおしゃれな雰囲気に仕上がっている。



コンクリートにタイルを埋め込む作業は、建て主と佐藤さんが一緒に行なった。最初は意外に難しいが、どんどん上達したという。

「建て主さんから電話があるたびドキッとしていました」（笑）

見積りする上での
ノウハウの不足を
思い知らされた

「一括請負の仕事だと、現場監督の判断で、設計が変えられてしまうこともあるんです。CM分離発注の場合は、設計したものがそのままできあがるから、嬉しい反面、言い訳がきかない。建て主さんから電話があると、『何か取り返しつかないミスでもしたんじゃないか』とドキッとしました（笑）」

一番大変だったのが予算の管理である。Fさんの家では、二十数社の専門工事会社と契約を交わした。佐藤さんがとりまどめて発注するのだが、実際に作業してみると、想定以上に細かい材料が必要になる場合がある。

「細かい部分の正確な金額が見積り段階で完全に拾えていなかった。そういうノウハウの不足をイヤというほど思い知らされました。結果的に予想以上の追加分をお支払いいただくことになり、それを説明するのがしんどかったです」

見るからに人のよさそうな佐藤さんは、積算の精度の悪さを悔やんでいた。だが建て主のご主人は「確かに予想よりもよけいにかかったのですが、その分、いいものができたので、価格面では納得しています」

と、あまり気にしていない様子。建物への満足度の高さと、佐藤さんの人柄への信頼が多少のミスはカバーしているようだ。

佐藤さんはCM分離発注の魅力を「建て主や職人と密度の濃い付き合いができること」だと語る。



外壁は、土塗り壁風樹脂塗りのジュラクペンアート（フジワラ化学）。屋根はガルバリウム鋼板縦ハゼ葺き。

●家の雰囲気にマッチした
オリジナル照明



佐藤さんが設計し、大工さんがつくった杉板の照明。蛍光灯 10型（電球 40W相当）のランプが2個ついている。



吹き抜けの上部、北面に取り付けられた杉板の照明。蛍光灯 15型（電球 60W相当）のランプが3つ並んでいる。



居間の東壁にある手づくり照明（蛍光灯 10型のランプ1個）。左右の板は杉板で、中央の濃い部分はピーラ材。



部屋の雰囲気が壊れないように、エアコンはむき出しにしないで木の枠で覆っている。涼しい空気を取り込み、暖まった空気を上に逃がす風の流れができていますので、夏もエアコンに便りすぎることなく暮らしている。



大工の木島さんが玄関のポスト下に取り付けた檜の木のカウンター。「無垢の木というのは、気候などによって動くんです。その動きをどこまでくみ上げていくかに苦労します」（木島さん）

職人さんぽい建築士とおしゃれな大工さん
それぞれの知恵とノウハウが結集



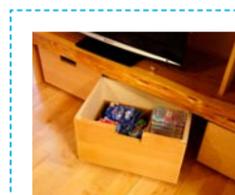
DATA / 設計監理者
佐藤秀人（さとひでと）
1953年生まれ
樺建築設計所
群馬県太田市成塚町150-411
TEL: 0276-37-3949
E-mail: satou@kunugi-sk.com
http://www.kunugi-sk.com/

前橋立工業短期大学卒業後、隈羽鳥設計に入社。1986年、(有)樺(くぬぎ)建築設計所開設。建築士4人で家づくりのための「すまいる講座」を開催。

然違う。こんなことならもっと早く家をつくればよかった、とそんな気がしています」（ご主人）
建築士にとっても、職人にとっても、なにより嬉しいのがこうした建て主の喜ぶ声である。
「CM分離発注は、自分がすべてを受け止める立場なので、仕事をやる上での覚悟が違います。今後は専門業者とのやりとりの密度をもっと上げていきたい。設計者が職人のノウハウも吸収すれば、それが建物にも反映され、お客さんのこだわるものに近づけます」
佐藤さんは今後もCM分離発注に取り組んでいくつもりだ。



リビングに置いてある檜のテーブルは建具やさん、杉のテレビ台は、大工さんの手づくり。この家の家具の多くは、佐藤さんが設計して職人さんがつくってくれたオリジナル。天井はなら合板。壁は珪藻土。



テレビ台の下にある物入れも、建具やさんがつくってくれたオリジナル。スペースに合わせてつくってあるので無駄がない。正面はピーラ材で他はシナ合板。下にキャスターがついていて簡単に引き出せる。



●オーニング窓 上下に繋がった窓が同時に斜めに開く窓。窓が庇のように前面にせり出すので、多少の雨なら開けっぱなしにしておいても大丈夫。外出時や夜間にも開けておける。

こんなことなら
もっと早く

佐藤さんがいつも着用しているのは作業着。建築士の枠にとらわれず、職人や建て主と一緒にできることを増やしたいのだと言う。
Fさんのお宅には、佐藤さんが設計し、職人さんが手づくりでつくった家具が多く見られる。
取材日、棟梁の木島慶博さんも顔を見せてくれた。明治・大正時代のような「品格のある大工」をめざしているという、スーツ姿のおしゃれな大工さんだ。
「家具にデザインや機能を加えるのは建築士さんじゃないと難しいと思う。そこに強度などを考慮して、末長く使ってもらえるようにつくっていくのが大工の役目です。今回は建て主さんの意見を直接聞くことができたので、やりがいがありました」（木島さん）
建て主、建築士、職人がそれぞれの意見を出し合うことで、家はよりよいものになっていく。これがCM分離発注の醍醐味でもある。「アパート暮らしが長かったのですが、自分の家というのは愛着が全